

# 出羽清原氏と海道平氏（上）

佐々木 紀 一

はじめに

後三年の役を経て、藤原清衡が奥州の支配者に勝ち残る過程は、『後三年合戦絵巻』に述べられるが、清原氏の当主真衡の没後、後継者で、当初源義家の支援を受けてゐた成衡が乱中、その地位を失なひ、姿を消すと云ふ複雑怪奇な展開を示す。その発端は、

真ひら、子なきによりて、海道小太郎成衡といふものを子とせり（『奥州後三年記』）

とある通り、真衡が成衡を養嗣子にした事があるが、一門を排して他家の人物を据ゑる理由が不明であつた。系図の記述が区々且つ胡乱、成立時期も不明であるが、成衡は桓武平氏流の岩城氏系図諸本に見えてをり、出羽清原氏との関係を確認する事も出来ないから、その関係、真衡の意図が問題となるのである。

然るに越後国の地頭中条氏に伝はる古系図（山形大学図書館蔵『中条文書』所収「桓武平氏諸流系図」、以下中条本と略）より、野口実氏が画期的な見解を明らかにした。同系図によれば源頼義を援けた清原武則は、岩城氏系図にも見える桓武平氏繁盛流の安忠子であるが清原に改姓した事が明記され、岩城を名乗る貞衡が武則の弟に見える事から、岩城（・海道）と出羽清原氏が同族であつた事が、問題の養子取の前提であつたと指摘したのである。成衡自身は「直成」の子と中条本の脇書にあるが、野口氏はこれを同じ繁盛流で城氏の先祖の貞成に比定して、貞衡の後継者になつたとし、後には「直成」は岩城貞衡その人の誤りと解した。同時にこの貞衡は、従来は真衡の誤りと解されて

みたのだが、延久蝦夷合戦に従軍し、その勲功により鎮守府將軍に任命された「応徳三年前陸奥守源頼俊款状」の貞衡であるとしたり。

『陸奥話記』で出羽俘囚とされる清原氏の出自、また国家支配権と清原氏の支配権の拡大に関して注目される、延久蝦夷合戦時の清原氏の当主と族的構成について問ひ直す事になる本系図の紹介は、当然、議論を引き起こした。野口氏論を承ける樋口知志氏は、続群書類従所収「清原氏系図」協書に清原武衡が「住岩城郡」とある事、及び同人が「平武衡」とある事をも補強として、鎮守府將軍任官者を中条本の通り、貞衡とし、同人は海道平氏からの養子で武則の後の清原氏当主に就いた事、また逆に武衡は海道氏に養子に出された事、この関係があつて成衡が清原氏の後継者として迎へられたと解する事が整合的であるとしたり。確かに平泉の柳御所跡出土の墨書折敷に「海道四郎殿」・「石崎次郎殿」が見え、海道氏と奥州藤原氏が政治的に同盟的な関係にあつた事は認められる。ただそれを出羽清原氏時代に遡らせる事が出来るだらうか。

一方、延久蝦夷合戦の軍事的規模から当主貞衡以外に該当者は考へられないとする入間田宣夫氏、「応徳款状」諸写本の字体の検討から貞衡は真衡の誤りとする小口雅史氏の反論がある。これには再反論もあるが、端的に中条本の信憑性に疑問を投げかける問題である。確かに野口氏自身、安忠と武則を親子とするのは世代が離れ、貞衡を武則兄弟とする点も、入間田氏・小口氏が指摘する様に、世代的にはその子が相応しい。また秀衡子孫部にも誤りが多い事は一見して分かる。中条本に部分的に正確な点のある事も指摘されるが、系図は必ずしも事実を再現するものではなく、作者の意図による虚構があり得るもので、中条本の当該箇所は、奥州藤原氏を同族の桓武平氏一族とすること、奥州に勢力扶植を図る北条氏の意向が働くとする白根靖大氏の推論もある。

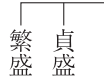
現在の所、清原氏が繁盛流平氏の出である事は、他の史料より確認出来ない。奥羽の武家支配成立に関はる重大な問題を提起しながら、不安視されるこの中条本当該部の史料性格と成立について、今一度考察するのが本稿の目的である。

一、中条本の問題

中条本の当該部は、『奥山庄史料集』・『中条町史 資料編第一巻』・前掲白根氏論・『青森県史 資料編 古代』に  
 翻刻があるが、山形大学附属図書館の紙焼写真に就く。

(中条本)

国香



維忠

出羽守 貞盛猶子

兼忠

上総介

高衡

左衛門尉

兼衡

左衛門尉

盛兼

安忠

菊多権守

武則

家衡

武貞

為義家朝臣被誅  
 荒河太郎

源頼義朝臣追討責任等之時戮其力仍家實為從五位  
 上総守府將軍改平為清原真人子孫同云々

清平

実平

成平

基衡

清大夫

清大夫

清大夫

清大夫

清大夫

清大夫

清大夫

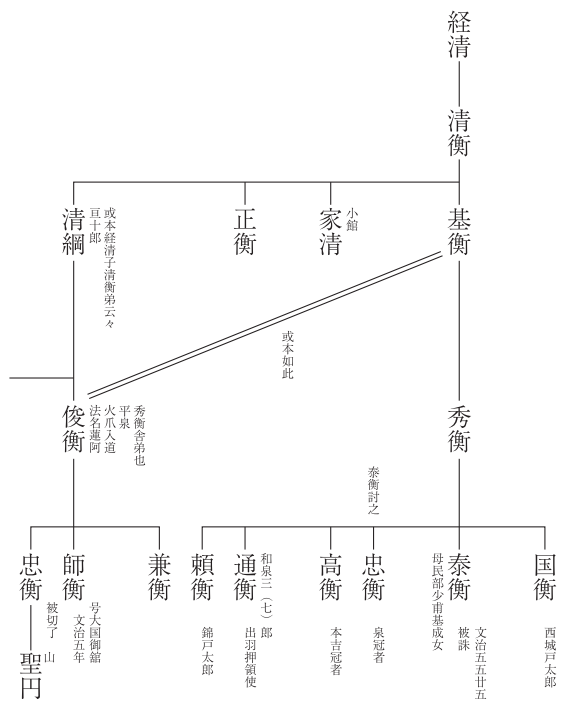
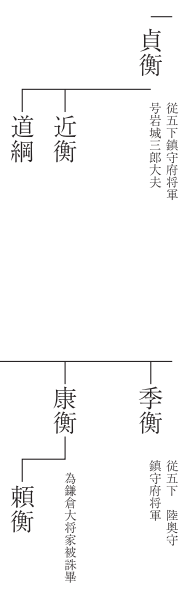
世号権太郎御箱  
 実白理権大夫麻経清子

海邊大小郎  
 実直成子

世号権太郎御箱  
 実白理権大夫麻経清子

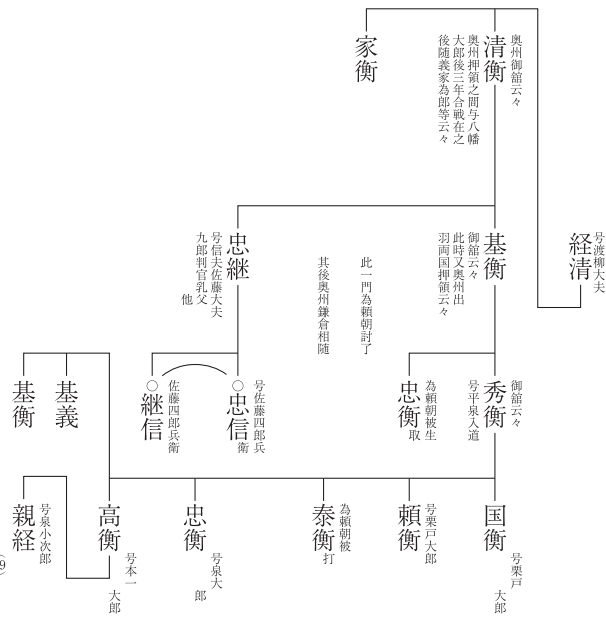
世号奥御箱  
 帯数乃之輔云

秀衡を「季衡」とするのは魚魯の誤りで、頼衡は『吾妻鏡』に見えない人物であるが、従来利用される新訂増補国史大系『尊卑分脈』にも見える（略記）。





と、錦戸太郎の仮名がある。『吾妻鏡』よりすると国衡の誤りで、『尊卑』は通衡なる未確認の人物をも挙げ、和泉三郎と重複させてゐる事になる。<sup>(18)</sup> 南北朝期の成立と推定される尊経閣文庫蔵『帝皇系図』(「藤成流」、これは仁和寺本系図集と一具)でも、



とあり、同様頼衡を挙げ、建暦の乱の和泉小次郎親平に紛ふ人物を子孫とする点、誤りを共有してゐるのである。<sup>(20)</sup>

系図との関係は確定出来ないが、中世の物語でも『義経記』巻八に「頼衡」・「通衡」が見える。秀衡の基成女の腹の子供として、

ちやくしやすひら、次男いずみの三郎みちひら、三なん四郎ときひら（田中本）<sup>(21)</sup>

とあるが、『義経記』本文でも西城戸太郎と泰衡の関係が曖昧で、諸本間に差異がある。

これよりさきのはらに、ちやくしにしきどの太郎よりひら（田中本）<sup>(22)</sup>

と、西城戸太郎頼衡・和泉三郎通衡が見えるからである。舞の本『和泉が城』<sup>(23)</sup>では、

秀平子を六人もつて候、兄をハ、にしきとの大ら、二男<sup>1</sup>□たての二郎、三男和泉の三ら、四郎元吉、ひつめ  
の五郎にて、五人は男子にて（文禄本「秀平」）

とし、後に太郎が「頼平」、二郎が「安平」、三男が「忠平」と見え、西城戸太郎が史実と異なり「頼衡」とある点、  
前掲の系図に一致する。

清原氏一門では、『保元物語』の一部伝本に、

八幡太郎義家、貞任追討の時、将軍三郎武則かす、めによつて、金交三領を木の枝にかけて、射通たりしそかし  
（宝徳本巻中「白河殿へ義朝夜討に寄せらるる事」）<sup>(24)</sup>

とするが、「将軍三郎」は「鎮守府將軍武則」の三男の意で、『吾妻鏡』養和元年九月三日条や後掲する系図を見る  
に、武衡に付される脇書であるから誤つてゐる。また『奥州後三年記』に、清衡・家衡は異父兄弟とあり、「家衡打  
越伯父武衡館」とある様に兩人は叔姪が正しいが、中条本では兄弟となるのが難である。しかし『吾妻鏡』では、

白河院御宇永保三年九月、曾祖陸奥守源朝臣<sup>義家</sup>於奥州、与將軍三郎武衡・同四郎家衡等遂合戦（治承四年十月二  
十一日条）

とあり、この筆法であれば家衡は「將軍四郎」となり、武衡と兄弟の如くである。端的に『神明鏡』白河紀では、

鎮守<sup>1</sup>□符ノ号<sup>ヲ</sup>ハ武則ニ申与<sup>2</sup>□羽州<sup>3</sup>□□管<sup>トシテ</sup>指置ル、去<sup>4</sup>□二子アリ、將軍三郎武衡・同四郎家衡トテ侍

リシカ（淨妙寺本）<sup>(28)</sup>

とあり、続群書類従所収の清原氏系図の別本四・五（後述）も正に兩人を兄弟とする。<sup>(29)</sup>

以上からすると清原・奥州藤原氏の族人、その関係についての知識は、鎌倉期より不確かであつたと思はれる。中条本当該部にはこの当時通有の誤りもあり、特に本系譜部のみが杜撰であると見る必要はない。

## 二、吉田文庫本と壬生乙本の『清原氏系図』

無論、中条本の史料的評価を幾分改めたとしても、問題箇所信憑性を証明する事にはならず、別にそれを信頼出来る史料より正す必要があるのだが、此処に中条本の成立を考察する上で、注目すべき系図がある。天理大学附属図書館吉田文庫蔵の『清原氏系図』一冊である。『吉田文庫神道書目録』によれば、江戸時代初期写。薄茶色表紙（豎二九・五糶、横二二・六糶、左上に朱紙題簽、「清原系図」と書。浅黄色綴紐）。表裏に本文共紙の見返しと遊紙一丁あり。第一丁表に「吉田文庫」の朱印あり。墨付八丁で本文一筆。朱筆は系線と、本文第一丁表の「嵯峨御宇」（夏野脇書）と「高与<sup>トモ</sup>」（舍人親王脇書）の「トモ」である。室町時代の清筑後守元定の脇書にスリケシがあり、一部「賞奉行」と判読出来る。<sup>(30)</sup>冒頭は、

清原 本姓海宿祿寛弘元年十二月改海宿祿

為清原真人 氏寺東大寺

とあり、天武天皇より始まり、その諸皇子を挙げ、清原氏を吉柯流・氏雄流の二流として釣り、夏野とは接続しない。前者に属する舟橋家の枝賢（一二二〇〜九〇）が最終掲載人物であるが、脇書を見るに、

（吉田本）

主水正  
局務 大外記  
枝賢 元頼  
母 小槻則元安

とあり、枝賢の官途は天文四年（一五三五）に大外記となり、少納言を兼ね局務となるのが永禄二年（一五五九）、同六年七月に宮内卿となるから、本系図の最終的成立は一応、永禄二年以降、同六年（一五六三）七月までの間と見て良い。

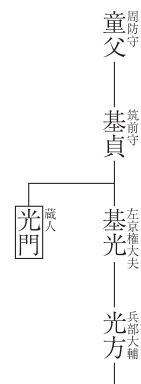
その構成を掲載順に挙げると、A、天武皇孫、その中のB、舍人親王流としてa、御原王流（夏野子まで）、b、守邦王流、c、氏雄流に大きく分かれる。cが一、海雄流、二、正高流（豊後清原氏）に分かれ、一は深養父に至り、1、春光流、2、重文流（①出羽清原氏・②公清流）に分かれる。

bは吉柯・広澄と続き、頼隆より一、定滋、頼業流、二、定隆流（1、定俊流、2、浄明流）に分かれ、2より関東清原流のI、清定流（i、長定流、ii、秀昌流、iii、満定流（①、重定流、②、成定流）、II、憲定流に分かれる。次いで本系とは切り離され、iii①の重定流に属する職定流が別掲される。

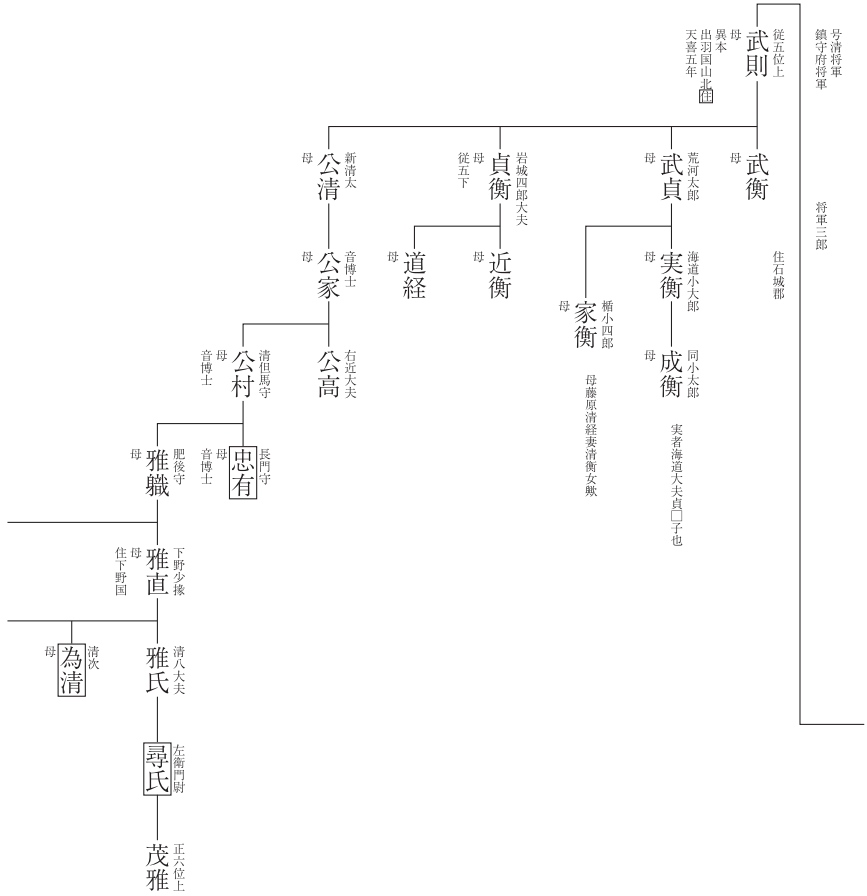
b-1頼業流は、I、近業流、II、仲隆流（i、仲宣流（①、隆尚流、②、隆重流、③、隆宣流）、ii、教隆流（①、有隆流、②、季隆流、③、直隆流、④、俊隆流）、III、良業流に分かれ、そのIIIが枝賢まで続くのである。

問題になるのはc-2で、深養父の子として釣られる「童父」は「重文」の誤りだが（家衡脇書の「清衡女」は「清衡母」の誤りだらう）、次の様に作る事である（□は虫損箇所）。

（吉田本）



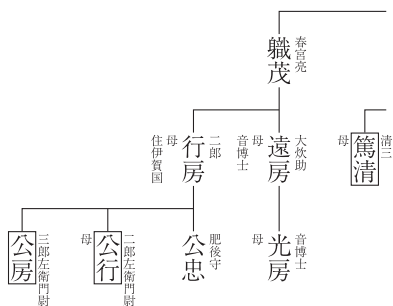




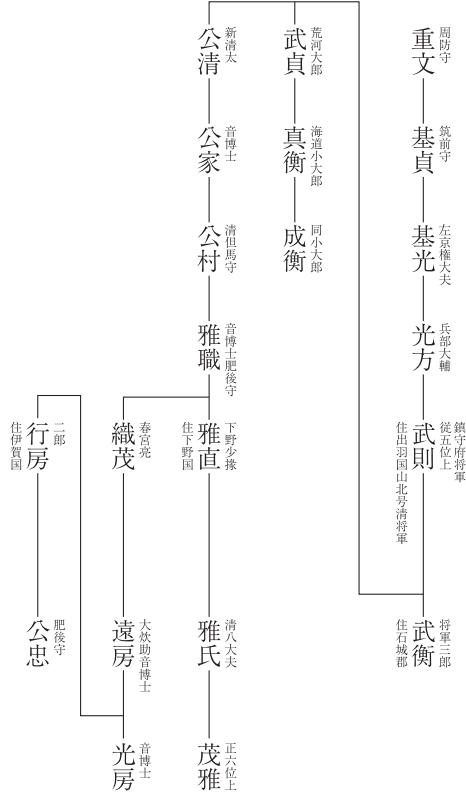
とあり、貞衡の存在、成衡実父の脇書を見るに中条本と同系の出羽清原氏系図であるとして良い。

勿論、武則を清原深養父の子孫とする点が、中条本に異なる等、細部の相違は大きく、両系図の関係が問題となるが、実は吉田本の武則流と一部共通する系図は既に統群書類従に紹介され、それが依拠した『諸家系図纂』につき、更に国会図書館蔵の中田憲信編『諸系譜』所収系図も併せて、野中哲照氏が清原氏系図の分類とその成立を研究してゐた。<sup>(32)</sup>宝賀寿男氏、野中氏が評価する、その『諸系譜』巻十四所収の「清原氏系図」・「吉美侯部氏系図」の成立には不安があり、筆者も樋口氏同様、従ひ難いのだが、近世の舟橋家当主まで掲載する『諸家系図纂』所収本よりも、早くに『図書寮典籍解題 歴史篇』「清原氏系図」（昭和二十五年二月）・『群書解題』第一「系一〇 清原氏系図」（昭和三十七年五月）に紹介される、書陵部蔵壬生本の清原氏系図、及び『尊卑分脈』「清原氏系図略」を利用すべきであらう。また最終掲載人物の世代が鎌倉末期に留まる仁和寺本系図集の「清原」を参照する必要がある。

壬生本には三種の清原氏系図が存し、本稿では電子公開によるが、記号の若い順に甲本・乙本・丙本とする。甲本の最終掲載人物は舟橋国賢（一五四四～一六一五）、諸道略本は頼賢（枝賢の前名）、丙本は宗賢（一四三一～一五



○一)である。その中で乙本に吉田本の武則流と近似する部分がある。  
 (壬生乙本)



とあり、壬生乙本は同じ深養父流で、公清流も同じく掲載するが、吉田本より簡略である事が分かる（吉田本の囲みが壬生乙本にない）。壬生乙本の舟橋家の最後の当主は枝賢祖父の大儒宣賢（一四七五〜一五五〇）であるから、最終的成立が吉田本より早い可能性がある。これからすると吉田本が壬生乙本を利用し、貞衡他の記事を増補したと見るべきだろうか。最初に上記清原氏諸系図の錯雑する関係について考察する。

### 三、清原氏系図諸本の関係について

壬生甲本は人物配置を見るに壬生丙本に同じで、それに記事を増減したと見て良い。

(壬生丙本)

西華門院藏人  
非従五下  
業元  
出家法名良空

元賢

崇賢門院藏人

(壬生甲本)

西華門院藏人  
非従五下  
業元  
出家法名良空

元賢

賢門院藏人

業氏  
源世 又遠俗

右京亮

勸解由判官  
元顕

少外記

業盛

宣盛

(壬生丙本)

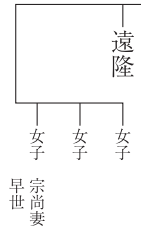
大和守  
非大膳亮  
教尚  
彈正忠  
尚隆  
大炊助  
教泰  
音博士  
英種

(壬生甲本)

大和守  
非大膳亮  
教尚  
彈正忠  
尚隆  
大炊助  
教泰  
音博士  
英種  
業種イ

とあるが、甲本の業元子では、業氏、元顕の位置が下がり、又業盛・宣盛兄弟（乙本にあり）は系線の外に書かれてゐる。これはそれぞれ後補の形態を残すものであらう（別本一では兄弟全て同列）。また教隆流の教尚を見れば（乙本なし）、

「遠隆



と、女子が小字で下段に折り込まれてゐる（別本一では兄弟全て同列）。

また清原氏の始祖について各本の冒頭を見るに（脇書略記）、

（壬生乙本・甲本）<sup>(40)</sup>

天武天皇―舍人親王―御原王―小倉王―夏野―**海雄**―房則―業恒―広澄

深養父

（壬生丙本・諸道略本袖書）<sup>(41)</sup>

御原王―小倉王―夏野―深養父―元輔

天武天皇―舍人親王―貞代王―有雄―通雄―**海雄**<sup>為夏野子</sup>―房則―業恒

とあるが、壬生丙本・諸道略本本系では系図の通例とは異なり、業恒、その隣に吉柯―広澄を挙げ、以下清原氏の系譜を繋ぐ。更に吉柯は小野氏で、瀧雄の子かとする注文が両本にあるが、『日本三代実録』貞観二年（八六〇）五月十八日条の小野恒柯卒伝・谷森本「小野氏系図」を見るに、相当する小野氏の諱は「恒柯」で、官途を見ても一致せず、広澄と世代が離れるから、別人である。この注文は後補であらう。

歴史的に確認出来るのは、広澄以下で、『続古事談』第五「諸道」第一四話に、

大外記頼隆真人ハ近澄カ子ナリ、広澄・善澄カライ也<sup>(45)</sup>

として、続いて「広澄カ子ニシテ」（「同」第一五話）ともあり、善澄は「清原ノ善澄」、頼隆も清原を姓とするから、<sup>(47)</sup>

広澄の清原改姓の事実は間接的に認められる<sup>(48)</sup>。但し業恒・広澄・近澄は古記録では海姓とあり、吉柯と業恒<sup>(49)</sup>、また広澄等との関係は不明であり、結句、この清原氏の血統は不明と言ふ事になる。

対して壬生乙本・甲本は吉柯を欠き、且つ天武天皇を始祖とし業恒を夏野の子孫とするが、これは壬生丙本袖書部の二流を合はせた形である。野中氏が指摘するが、天武よりの一貫した系統を解き、不明な吉柯を中途から始祖として挙げる形態に改変したと見るよりは、始祖を貴種天武天皇に遡り、著名な学者夏野に接続させる形態が後出で、壬生乙本は、壬生丙本の袖書と本系を整理し、その過程で吉柯を除いたものであらう。また壬生丙・甲本では関東評定衆となる流れを「清家庶子近澄流」として、末尾に別掲するのに対し、壬生乙本及び諸道略本はこれを本系に組み入れるが、これも同様後出本の整理と解して良い。

以上、壬生甲乙丙本・諸道略本の中で、壬生丙本が古いと説明する事になり、壬生丙本冒頭の、

六第二<sup>(51)</sup>上 四道儒乙 明経道

・明経道上 外記局同之

清原 ・真人<sup>(52)</sup>本者海宿祿

寛弘元年十二月 博士広澄 改海宿祿

為清原真人

とある分類記事の共通から、本系図も『尊卑』と一具であるとするならば、その原型の成立時期が南北朝期になるが、皆川完一氏は本来の『尊卑』に諸道系図は含まれないとする<sup>(52)</sup>。その判断は付かないが、仁和寺本の冒頭を見るに、

(仁和寺本)

右大臣左大将

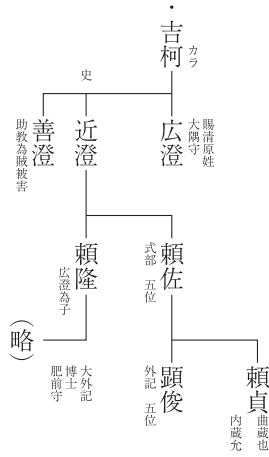
夏野

清原祖

舍人親王—御原王

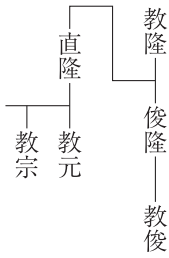
清原 元海宿祢

寛弘元入  
賜清原眞

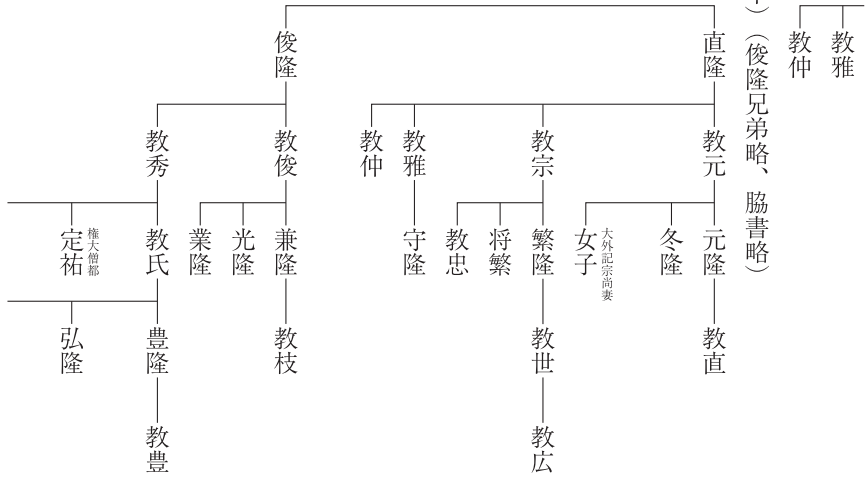


とあり、吉柯を始祖として、前述した壬生丙本の本系冒頭と一致する一方、舍人親王・夏野は上欄に独立して記すに留める。夏野・舍人親王との接続が成されてゐない点からすると、仁和寺本が壬生丙本袖書（更には壬生乙本）より出たと見る必要はない。また仁和寺本は総じて脇書は少なく、掲載人物も他本に比べ少ないが、仁和寺本の本系部分では外記流が宗尚・頼元の兄弟に留まる様に、掲載世代が鎌倉末期までで、ほぼ頼隆流のみに留まる。

(仁和寺本)



(壬生丙本) (俊隆兄弟略、脇書略)

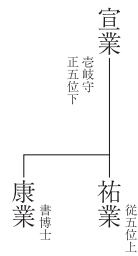




「女子」  
「行隆」

とある如くである。一方、壬生丙本と異なる所もある。例へば頼業の子として仁和寺本は宣業流を持つが、壬生丙本を含め、他の系図にはない。

(仁和寺本)



これからすると仁和寺本そのものでは無い事になるが、始祖不明の吉柯より始まる外記流清原氏のための系図が、鎌倉時代末期には既に存したと推定出来る。壬生丙本はそれに増補し、次いでその他の壬生諸本・諸道略本は吉柯を除き、始祖を天武天皇とし、以降の系統・人物を増補したと見るものである。

注

- (1) 中央公論日本の絵巻による。次の『奥州後三年記』は『青森県史 資料編 古代』による。
- (2) 『中世東国武士団の研究』第一部第三章「十一〜十二世紀、奥羽の政治権力をめぐる諸問題」(平成六年十二月、初出は平成二年)
- (3) 「平安期における奥羽諸勢力と鎮守府将軍」(角田文衛先生傘寿記念会編『古代世界の諸相』所収、平成十五年九月)
- (4) 高橋富雄氏『藤原清衡』I「奥六郡と族長制」(昭和四十六年、此处では清水新書版『平泉の世紀 藤原清衡』に依る)
- (5) 『青森県史 資料編 古代』所収。以下、「応徳款状」と略。

- (6) 旧宮崎文庫本『百鍊抄』寛治元年十二月二十六日条(新訂日本国史大系の校勘)。一方『今昔物語集』二十五の標題では、「源義家朝臣罰清原武衡語」とある。『吾妻鏡』養和元年九月三日条でも清原姓で、『梅松論』も「清原武衡・家衡」(学習院本〔紙焼写真〕)による。竜門本〔龍門文庫善本叢刊『梅松論・桜雲記・神皇正統記』)同とする(京都大学国史研究室本〔紙焼写真〕・行誉本〔小助川元太氏「行誉編『璫囊鈔』の研究」所収〕傍線なし)。
- (7) 『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』第三部第二章「延久二年合戦について」(平成二十三年三月、初出同十九年)
- (8) 『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』第一部第二章「前九年合戦と後三年合戦」(平成二十三年三月、初出同十八年)
- (9) 三浦謙一氏「柳之御所出土の墨書折敷」(平泉文化研究会編『奥州藤原氏と柳之御所跡』〔平成四年四月〕所収)
- (10) 岡田清一氏「奥州藤原氏の奥羽支配―折敷墨書を読む―」(『政治経済史学』三四八、平成七年六月)・同「鎌倉幕府と東国」第一編第一章「奥州藤原氏の奥羽支配」(平成十八年一月)。岩崎氏は「奥州岩崎平四郎左衛門妻」(『大中臣氏略系図』時景女協書)とある事からすると、平姓である事が分かる(網野善彦氏『日本中世史学の課題』第一部第二章「桐村家所蔵『大中臣氏略系図』」、平成八年三月、初出昭和五十七年)。
- (11) 『北日本中世社会史論』「鎮守府將軍清原真衡の政權構想」(平成十七年八月)。その他、遠藤巖氏「延久元々二年の蝦夷合戦について」(『宮城歴史科学研究所』四十五、平成十年四月)、斎藤利夫氏「安倍・清原・平泉藤原氏の時代と北奥世界の変貌―奥大道・防御性集落と北奥の建郡」(『十和田湖が語る古代北奥の謎』、平成十八年七月)
- (12) 「延久蝦夷合戦をめぐる覚書」(中野栄夫氏編『日本中世の政治と社会』所収平成十五年十月)・「延久蝦夷合戦再論―応徳本系『御堂御記抄』諸本の検討を中心に―」(義江彰夫氏編『古代中世の史料と文学』、平成十七年十二月)
- (13) 樋口知志氏『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』第三部第二章「延久二年合戦について」・遠藤祐太郎氏「延

久蝦夷合戦と清原真衡・貞衡」(沢登寛聡・小口雅史氏編『アイヌ文化の成立と変容―交易と交流を中心として』所収、法政大学国際日本学研究所刊、平成十九年三月)

(14) 野口実氏(3) 論文。

(15) 井原今朝男氏「中世善光寺平の災害と開発―開発勢力としての伊勢平氏と越後平氏―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』九十六、平成十四年三月)

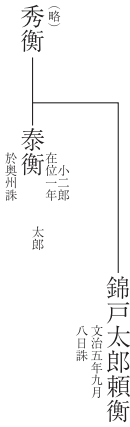
(16) 「中条家文書所収「桓武平氏諸流系図」の基礎的考察」(『東北中世史の研究 下巻』所収、平成十七年六月)

(17) 『伊佐早謙採集文書(夜藤文書)』の秀郷流系図では、秀衡子に道衡と泰衡が挙げられ、前者に「西木戸太郎、不審」との脇書がある(東大史料編纂所の謄写本)。「佐藤文書」一「佐藤氏系図」でも「城太郎」「道衡」を挙げ(『三重県史 資料編 中世二』)。

(18) 『尊卑』に近く、秀衡子に重複が少ないのが『諸家系図纂』「小山結城」(続群書類従『秀郷流系図』「結城」が同じ)である。

(19) 『吾妻鏡』建保元年二月十六日条。

(20) 西足院本『平家物語』巻十二(臨川書店刊影印)では、「西木戸ノ太郎頼衡・泉小次郎泰衡」とし(大前神社本(おうふう刊影印)は傍線部に「三イ」とあり、南部本・米沢本は波線を「奥ノ」とする〔共に電子公開〕)、正宗寺本『諸家系図』(東大史料編纂所謄写本)でも、



と同様の誤解がある。

- (21) 未刊国文史料『田中本 義経記と研究(下)』による。赤木本(国学院大学図書館の電子公開)同。橘本『官物語』「ちやくしにしきと、しなんやすひら、三なんいつみの三らた、ひら」、芳野本「ちやくし二男やす平、三男いづみの三郎たむね」(十二行古活字本同)、天理本「ちやくしやすひら、二なんいすみの三郎た、ひら、三なん四郎きよひら」、和田本「ちやくしやすひら、二千人いつみの三郎みちひら、三千人」(橘本・芳野本は汲古書院の影印、天理本は伝承文学資料集成『義経双紙』の翻刻。十二行古活字本は日本古典文学大系、和田本は、和田琢磨氏「新出『義経記』巻八零本の紹介と位置付け」(『古代中世文学論考』三十四、平成二十九年五月)による。
- (22) 赤木本・和田本・十二行古活字本傍線部同。
- (23) 天理図書館善本叢書『舞の本 下』による。大頭本(天理図書館善本叢書『舞の本<sup>大頭本</sup> 三二)ほぼ同。
- (24) 陽明叢書『保元物語』による(陽明甲本〔同前〕・金刀比羅本〔日本古典文学大系〕・九州大学本〔在九州国文学資料影印叢書〕・東大国語研究室本〔東京大学国語研究室資料叢書『保元記・平治物語』〕・杉原本〔古典研究会〕同)。鎌倉本(古典研究会)・京図本系(根津本・京図本〔共に電子公開〕・早稲田大本〔『早稲田大学蔵影印資料叢書 軍記物語集』〕・龍谷大本〔電子公開〕・竜門本波線部あり。文保本〔汲古書院の影印〕・半井本系諸本〔『半井本保元物語 本文・校異・訓釈編』〕・東大国文研究室本(『東京大学文学部国文学研究室蔵『保元物語 翻刻と研究』)は波線部なし。
- (25) 『吾妻鏡』文治五年九月二十三日条。
- (26) 『醍醐寺新要録』所収「慶嘉法橋日記」建暦二年二月十五日条(『大日本史料』寛治元年十二月二十六日条は「將軍」を義家と解してゐる)。
- (27) 『康富記』文安元年閏六月二十三日条趣意文(増補史料大成)。
- (28) 東大史料編纂所蔵の謄写本による。校異は、1岩瀬本・彰考館本―なし、2岩瀬本・彰考館本―「テ」、3岩瀬本・彰考館本―「御代官」、4岩瀬本―「ル」(諸本と校異の方針は拙稿「『神明鏡』・『王年代記』」所引『平家

物語』巻二・四・八本文について(上)」「(山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』二十九、平成十四年三月)参照のこと)。典拠を同じくする『源威集』にも「永保年中、武則<sup>子</sup>、將軍三郎<sup>武衡</sup>、同四郎<sup>家衡</sup>誅伐事也」(秋田県立図書館蔵の紙焼写真による)とある。猶、『源威集』よりも古態を残すのが、各種佐竹氏系図所引逸文であるが、水戸光明院蔵『佐竹代々記』佐竹氏系図所引本文を見るに「家衡・武衡」とだけある(拙稿「『神明鏡』伝本の整理と分類について」補注)、『米沢国語国文』二十八、平成十一年七月)に当該本文を翻刻)。

(29) 三条実治写『王代記抜書』寛治五年条(東大史料編纂所謄写本)も「武衡・家衡八鎮守府將軍武則カ子也」とする。

(30) 同人は『室町幕府諸奉行次第』(東大史料編纂所蔵謄写本)に諸奉行の兼任が確認される。『基恒日記』享徳二年四月二十六日条に初名「元俊」とあり、康正二年正月二十六日条に「清式部四郎元俊」、『親基日記』寛正七年正月二十六日条に「清四郎左衛門尉元定」、『室町家御内書案』(明応四年三月十九日、『室町幕府文書集成』奉行奉書篇)一九七二)に「前筑前守判(元定事)」と見える。

(31) 『公卿補任』天正四年枝賢条(新訂増補国史大系)。

(32) 「出羽山北清原氏の系譜―吉彦氏の系譜も含めて―」(『鹿兒島国際大学国際文化学部論集』十五ノ一、平成十六年六月)。正統群書類従所収本は名称が紛らわしいので、本稿では、以下、野中氏の正統群書類従の掲載順と番号を挙げるが、対応する『群書類題』の命名に基本的に従ふ。また対応する『諸家系図纂』は内閣文庫の電子公開の標題による。『諸家系譜』は国会図書館の電子公開による。

正統群書類従名称

群書類題番号・名称

諸家系図纂

群書類従「清原氏系図」(2)

系一〇 「正群本」

統群書類従第一号「清原系図」(3)

系三五二、「別本零」

卷二七「清家系図」

同一号「清原系図別本」(4)

系三五三、別本一

卷二一「清家系図」

- 第三号「清原系図庶子近澄流」(5) 系三五四、別本二 同右「清原系図庶子近澄流」・卷27「清家庶子近澄流」
- 第四号「清原系図」(6) 系三五五、別本三 同右「清家系図二篇」一・卷27「清原系図二篇」一
- 第五号「清原系図」(7) 系三五六、別本四 同右「清家系図二篇」二・卷27「清原系図二篇」二
- 第六号「清原系図」(8) 系三五七、別本五 「諸系譜」卷十四ノ一「清原氏」
- この内、本稿では、群書類従本は正群本、続群書類従第一号本は便宜的に別本零とする。
- (33) 『古代氏族系譜集成 上』(昭和六十一年四月)
- (34) 樋口知志氏「安倍・清原氏の祖先系譜」(同氏編『東北の古代史五 前九年・後三年合戦と兵の時代』所収、平成二十八年四月)
- (35) 此処では吉田本と同筆の吉田文庫蔵『諸道略系図』一冊(薄茶色表紙、豎三〇・一糎、横二二・〇糎、左上に朱紙題簽に「諸道」と書。浅黄色綴紐。前後に本文共紙の見返しと遊紙、墨付三十九丁で本文一筆。鉤点、系線が朱筆)により、諸道略本とする(新訂増補国史大系の脇坂本よりも宮内庁書陵部蔵谷森本に一致する。また彰考館蔵佐野本系図所収の「清原」は脇書・人物に省略があるが、同じ系図である。東大史料編纂所の謄写本による)。別本三・正群本に近い。後者はその吉柯を外し、業恒と広澄を繋げたか。また吉田本・諸道略本同筆の系図として、吉田本の『平橘氏』(吉六二一六)・『諸家略系図』(吉六二一七)が管見に入った。
- (36) 東大史料編纂所蔵謄写本『仁和寺文書』十四所収による。
- (37) 『清家系譜』一卷(四一五・二〇三)。別本一・別本二にはほぼ一致。但し前者では秀賢の兄弟を二人釣る。
- (38) 『清原氏系図』一卷(四一五・二二二)。国立歴史民俗博物館蔵高松宮本『清原氏系譜』一卷が同じ。別本四、同五に近い。
- (39) 『清原氏系図』一卷(四一五・二二六)。
- (40) 甲本は深養父以下なし。又官位の脇書が少ない。

- (41) 諸道略本では「為夏野子」は房則に付せられる。
- (42) 『日本三代実録』貞観五年正月十一日条に薨伝が見え(新訂増補国史大系による。以下『三代実録』と略)、『二中歴』第十三「一能歴 能書」に見える(尊経閣善本影印集成)。
- (43) 新訂増補国史大系『尊卑分脈 第四篇』所収。
- (44) 広澄は一条天皇時代の人とされ(『続本朝往生伝』〔真福寺影印叢刊『往生伝集』〕)、『桂林遺芳抄』巻四「課試之時称方略例」に「少外記兼直講海宿祢広澄」(寛和二年十月、『大日本史料』二ノ一、同年同月二十六日条所引)、『外記補任』寛和元年(九八五)〜永延二年条(九八八)(『続群書類従』、『御堂関白記』寛弘二年(一〇〇五)八月二日条に「大博士広澄」と見える(大日本古記録)、『二中歴』第二「儒職歴 博士」にも海姓が確認出来る。『同』十三「一能歴 明経」に「大江」とあるのは誤りであらう。壬生丙本にその弟とある正澄は『小右記』寛仁元年(二〇二七)十月十三日条裏書の天徳四年(九六〇)十一月十九日条に「少外記海正澄」(大日本古記録)、『外記補任』天徳四年〜応和三年(九六三)と見える。
- (45) 神戸説話研究会編『続古事談注解』による。
- (46) 『今昔物語集』二十九「明法博士善澄被殺強盗語」(日本古典文学大系)、『二中歴』第十三「一能歴 明経」・『官職秘抄』「明経」(群書類従)には海姓と見える。
- (47) 『類聚符宣抄』巻六「応令民部省以請印捺漏白紙官符且勘会公文事」・『朝野群載』巻九「中原章貞内匠頭申文」(共に新訂増補国史大系)・『二中歴』第二「儒職歴 文章博士」・『官局歴 大外記』による。
- (48) 系図では寛弘元年(二〇〇四)十二月に海宿祢より清原真人に改めるとあるが、『権記』寛弘元年三月二十一日条に「宿祢」と見え、矛盾ない(史料纂集)。
- (49) 近澄は『小右記』寛和元年(九八五)十月十四日条に見える。業恒は『二中歴』第二「官局歴 大夫史」に、共に海姓として見え、『官職秘抄』「勘解由使」を見るに同判官に、天曆六年正月に「主計頭」となった事が分かる。

〔二中歴〕第二「諸司歴 二寮頭」。

(50) 『九曆』天徳元年(九五七)四月十二日条に見える人物と考へられるが、姓は不明(大日本古記録)。

(51) 前掲『図書寮典籍解題 歴史篇』「諸道系図」

(52) 『国史大系書目解題 下巻』「尊卑分脈」(平成十四年七月)

(53) 正中二年(一三二五)五月没(『花園院宸記』同二十四日条、増補史料大成)。

(54) 『外記補任』徳治四年(一三〇七)条。

(55) 俊隆は『経俊卿記』康元二年(一二五七)三月二十九日条(『図書寮叢刊』・『勘仲記』弘安五年八月七日条(史料纂集)に、教元は『花園院宸記』正和元年(一二二二)正月十六日条(増補史料大成)・『実躬卿記』乾元元年(一二〇二)三月二十三日条(大日本古記録)・『外記補任』正応四年(一二二五)条に、教宗は『花園院宸記』文保元年(一二二七)四月十九日条・『外記補任』正応四年条に、冬隆は『外記補任』元徳元年(一二三九)条に、教直は『師守記』貞治二年(一二六三)閏正月二十七日条(史料纂集)に見える。吉田本・壬生乙本は教雅・教仲なし。

(56) 宣業は『民経記』寛喜三年(一二三一)九月七日条(大日本古記録)・『外記補任』建暦元年(一二二一)条に見える。祐業は『民経記』天福元年(一二三三)正月二十五日条に「権少外記」、康業は『経俊卿記』正嘉元年(一二五七)七月日条に「常陸介」と見える。